

2024 年度自己評価 施設関係者評価

学校法人琴似キリスト教学園
認定こども園琴似教会幼稚園

1. 教育理念・教育目標

保育の理念

- ・キリスト教の精神に基づいて一人ひとりの個性を大切に子どもたちの心身を育て「共に生きる喜び」を伝える。
- ・聖句『光の子として歩みなさい』（エフェソの信徒への手紙 5 章 8 節）

保育目標

- ・神さまに愛され守られていることを知る
- ・自分らしくのびのびと表現する
- ・自分のこともみんなのことも大切に思う

2. 2024 年度の重点目標

- ① 神さまに愛され守られていることを知り、安心して過ごす。
- ② 自分の好きな遊びを見つけて友だちや保育者とじっくり遊び込むことが出来るよう、保育者の関わり方・遊びの内容・環境構成に十分な配慮と計画性をもって保育を行う。
- ③ 園児と職員の健康と安全を守る体制の構築を目指し、適宜見直して対応する。
- ④ 長時間の保育を受ける子どもへの必要な援助を行うとともに、園全体が安心感と親しみをもって相互に関わることのできるよう温かい雰囲気を作り出すよう努める。
- ⑤ 日常の様々な場面で、常に自分達の保育を振り返り、時代や社会のニーズに柔軟に対応しながら、何よりもまず目の前の子ども達を大切に、保護者の思いや願いを汲み取り、キリスト教主義のこども園に相応しい思いやりと優しさをもって歩む。

3. 取り組みと評価

区分	評価項目・内容	評価	取り組み状況
教育・保育目標	園の建学精神や教育・保育目標の理解	4	認定こども園教育・保育要領の内容の理解を深めていけるよう学ぶと共に、建学の精神や保育目標について職員全体の研修を年度当初に行い、理解の一致に努めた。しかし思いのすれ違いや確認不足など細かな修正が必要な事も多かった。 目標に向かってのねらいの設定を、実践と学びの繰り返しのなかで見直ししながら進めた。
	認定こども園教育・保育要領の理解と、子どもの実態に即した目標の設定	4	
	目標は前年度の反省を生かしているか	4	

	<p>目標は社会の要請や保護者の願いを反映しているか</p>	4	<p>社会の要請に十分に応えるだけの目標を掲げることは難しく、実現の可能性を探りながら慎重に設定していきたい。保護者との信頼関係が出来上がる中で、目標と保護者の願いの一致を確認しつつある。</p>
ねらい・保育内容	<p>乳児期の園児の教育と保育は、その特性に合わせ、適切に行われているか</p>	4	<p>【健やかに育つ】 4月入園の子と途中入園の子の月齢差が大きく、生活リズムも異なっていた為に、クラス全体の活動や個々の生活リズムに合わせた対応に難しさを覚えた。又、開園以来初めての冷凍母乳など個別対応の難しさを痛感させられたが、0歳児クラスと1歳児クラスの交流によって対応幅を広げ、保育者間の協力体制を発揮する事ができた。</p> <p>【気持ちを通わせる】 遊びや生活の中で子どもたちが出すサインや仕草、身振り手振りを受け止め、言葉で代弁してあげることで、やり取りを楽しめるよう心がけていった。柔和な表情や態度で子どもと関わるよう努めたが、子どもが伝えようとしている事が汲み取りにくい場合もあり、時間をかけて気持ちを理解していくことも多かった。担当する保育者間でこまめに伝え合ったり、ちょっとしたことを一緒に喜び合う中で子ども理解が深まり、基本的な信頼関係にも繋がったように思う。</p> <p>【感性が育つ】 玩具や環境構成等については、まだまだ学びの多い分野であると思う。試行錯誤しながら手作り玩具を増やしたり、心地よい音の鳴る物、自然の物、色彩の美しい紙や布や絵具等を遊びの中に用いたり室内装飾に用いるなど、生活空間を整えるように努めたが、更に工夫や研究を重ねていきたい。</p> <p>【全体として】 個々の気持ちに寄り添い、生活リズムに合わせた保育ができるようになってきたが、途中入園の受け入れによってクラス全体の生活が変わってしまうなど難しさを覚えた。基本的信頼関係の中で安心・安全な保育ができるよう丁寧な保育に努めている。精神的発達に必要な身近な物の環境作りは少しずつだが前進し、整えられつつある。</p>
	<p>1歳から満3歳未満の園児の保育はその特性に合わせ、適切に行われているか</p>	4	<p>【健康】 今年度は1歳児クラスの月齢差が大きく、年度当初、歩行自立していない子が3名いた。保育室を昨年度とは大きく変えて、ハイハイスペースと歩行の安定した子が過ごすスペースに分けて、安全の確保、遊びの保</p>

		<p>障ができるよう心がけた。運動機能面については、発達段階の理解をもっと深めて保育に活かしていきたい。トイトレニングは、家庭での協力が不可欠であるが、足並みを揃えて進める難しさを感じることもあった。保護者と丁寧に話し合いながら、子どもの意欲と適切な時期を見定めて進めていけたらと思う。</p> <p>【人と関わる力】乳児部の保育者の入れ替わりが少なかったことで、お互いの目線や呼吸を合わせたスムーズな保育と、子どもの共通理解が深まった。又、前年からの年長児が行事のお手伝いや「お世話」をしに保育室に来て交流する活動を、園生活全体の中で自由に交流できるよう工夫し、年齢の枠を越えた関わりが今以上に多くなるようにしていきたい。</p> <p>【環境に関わる力】教師の気づきの目を養うことが出来るよう保育会議や研修等の分かち合いの時間を大切にしていけたらと思う。今年度室内環境、手作り遊具、ままごと具材等研究グループを立ち上げたが、まだ試行錯誤の繰り返しで、園の保育活動に活かすには至っていない。保育者の好奇心や探求心を出し合い、子どもの興味や関心を探りながら、穏やかで心豊かに生活するのに相応しい環境作りを一層求めていきたい。</p> <p>【言葉】優しい表情や口調の声掛け、心地良いリズムの言葉を使うなどを心がけた。イメージを膨らませるような言葉かけは、保育者の感性によるところも大きく、気持ちにゆとりを持つことの必要を痛感した。日常の保育の中で「嫌」という否定的な言葉も、子どもの表現として大切に受け止め、何が嫌だったのかをやり取りの中で探りながら、気持ちに寄り添った保育を心がけてきた。</p> <p>【表現】毎日の遊びの中で、手遊びやふれあい遊びなどを取り入れることで全身を使う運動ができた半面、子どもが表現していることを遊びにつなげ、より楽しめるような素材、道具などの準備には不十分なことが多かった。安全管理上の問題で、口に入っても安全な物等の制限はあるが、感触遊びを十分に楽しめるような物や、楽しい表現に繋がるような素材を増やしていきたい。</p> <p>【全体として】保育時間の長い小さな子ども達が1日を快適に過ごし、安定した気持ちで健やかに成長していけるよう、子どもの気持ちを汲み取る事や、細やかな配慮</p>
--	--	--

	<p>と工夫の中でゆとりある保育を進めるよう心がけた。まだまだ、ちょっとしたことへの気づきが足りなかったり、環境構成上の工夫は必要だが、担当保育者間で話し合いの機会も充実してきて、子ども理解の一致においては一歩前進と捉えている。</p>
<p>満3歳以上の園児の教育と保育は、その特性に合わせ、適切に行われているか</p>	<p>4- 【健康】誕生会の特別メニューや、行事食によって食事を楽しみにする姿が増えた。看護師が常勤になったのを機に、手洗い推進や歯の健康について知る機会を設けたことで、健康習慣への意識が高まった。安全管理のチームができ、危険個所のチェックと改善のアイデアを出し合う活動を行った。それぞれの保育者の危険予知や安全のためのアイデアを積極的に伝え合っていけるよう、今後一層職員の意識を高めていきたい。大人の安全意識の高まりによって、子ども達が危険を回避したり自ら進んで健康で安全な生活を送ることに繋げていきたい。</p> <p>【人と関わる力】ゆとりのある保育者配置によって子どもたちへのきめ細やかな配慮ができた反面、成長段階に相応しい関わり方を保育者間で統一するのが難しく、本来の力を伸ばしきれない側面も見られた。本来、友達と協力したり伝え合ったりして活動する醍醐味から外れ、先生に頼りかねない場面もあったので、子どもの成長を信じて見守る事も必要と改めて痛感させられた。自分たちで気づいたり助け合う力を一層伸ばしていきたい。ただ、支援の必要な子に対して、保育者以上に根気強く関わる姿が多く見られたことは本当に嬉しく、日頃の保育者の関わりが如何に大切か改めて考えさせられた。12月に年長組が生誕劇に取り組む姿を見て興味を持った他のクラスの子(0~4歳)が多く、クリスマス会の後も何度も年齢問わずステージで生誕劇を演じたり歌ったりしながら降誕物語に親しみ、印象深い活動となった。</p> <p>【環境と関わる力】生活に必要な数・時間や様々な表示などが規則性をもって美しく整えられているか、日常生活に使う道具や絵本や遊具がきれいに整えられているか等、不十分な点が多く改善して行きたい。近隣の公園によく出かけたり、園庭で発見した蝶のさなぎを羽化するまで保育室で大事に見守って、皆で感動を味わうことができた。子どもの発見を伝え合ったり、自然と関わる楽しさを知ることで、自然を大事にする姿勢を育てていき</p>

		<p>たい。その為には大人の意識の向上も必要となる。クリスマスの機会に世界の様子にも目を向け、自分たちに何ができるのかを考えた経験は貴重なものであった。</p> <p>【言葉】郵便ごっこその他、言葉や気持ちを工夫して伝えようとする活動が多く見られた。行事の際に空想のキャラクターとの手紙のやり取りがあったり、友だち同士の手紙交換もあった。文字を書くだけでなく、伝え合うことを楽しむ姿が増えた。拙い表現であっても、言葉や色々な方法で伝え合う力を育てると共に、集中して聞いたり理解する力が育つよう取り組んできた。年少組ではちょっとした劇ごっこやペープサートを自分達で楽しむ姿がクラス全体の活動に広がった。言葉を大切に子どもの思いに寄り添い、耳を傾けていきたい。絵本に親しみ、素話に触れる機会も引き続き大事にしていきたい。</p> <p>【表現】子どもにとっては生き生きとした体験であっても、実際の表現としては素朴でわかり難い事も多いが、表現する喜びが感じられているかどうか、何を表現したいのか等、一人ひとりの表現を少しでも理解できるよう、心がけてきた。イメージはあっても表現しきれない部分を少し手伝ったり一人ひとりに合わせて援助しながら、表現する喜びを十分に味わえるよう今後も保育者として向上していきたい。展示スペースを作って作品を飾りやすくしたことで互いの表現を見比べたり、講師を招いてのアート教室をきっかけに大きな作品に挑戦したり、活動の幅を少し広げることができた。</p> <p>【全体】自分らしさを発揮して意欲的に活動するための保育者の関わり方に試行錯誤しながら、保育に取り組んだ。保育者は子どもと一緒に驚いたり喜んだりする中で、個々の気持ちをくみ取りながら、他者と自分の違いを認め受け入れ合いながら集団としても育ていけるようその時々に応じて援助する一方、子ども理解の難しさも痛感させられた。目の前の子どもが出している沢山のサインに気づき、的確に理解し、見通しを持った計画のもとに柔軟な保育ができるよう更に努めていきたい。</p>
教育・保育	乳児期の配慮	<p>4</p> <p>保護者との信頼関係を第一に乳児の保育を開始した。戸惑うこともあったが、一人ひとりの状況をよく理解し、その時々の子どもの細やかな観察や具体的な場面での伝え漏れが無いようするなど細心の注意を払った。</p>

		職員会議で子どもの疾病について学ぶ機会を多く持ち、乳児の保育の配慮事項について園全体の職員が知る良いきっかけとなった。子どもの怪我対応について迷う時には、看護師他、複数人で判断するようにした良さの反面、看護師が主に0歳児クラスを担当しているので保育が中断されることも多く、今後の役割配置を見直す必要もある。
	1歳以上満3歳未満の配慮	4 保護者との信頼関係を築くことを第一に乳児の保育に取り組んでいるが、保護者との考え方のズレや連携が困難な場合もあり、悩むことも多かった。自分の気持ちや考えをわかって欲しいという保護者の思いを受け止めつつも、子どもの園での姿を伝え、経験の少ない保育者だけで難しい際には園長や副園長が話をし、園の方針や日常の保育のあり方について理解を得るように努めてきた。看護師や管理栄養士の立場からの専門的な知識が問題解決の糸口となる事も多く、職員側の協力体制はこれからも大事にしていきたい。
	教育・保育全般の配慮	4 今年度は、両親が海外の方で日本語の理解が十分ではない家庭に対して、通訳を交えて面談をしたり、小学校進学に向けて、教育相談に保育者も一緒に行く等しながら安心して進学出来るように務めた。また、ジェンダーの取り扱いで変化が見られ、運動会のチアガールと応援団の区別をなくしたり、クリスマスの配役を子ども同士で相談しながら決める際にも性別に捉われることが少なくなり変化を感じている。一方プライベートゾーンの配慮について保護者からの要望が寄せられるなど、これまで以上に配慮する必要があると共に、自分の大事な部分を子ども自らが知っていくような教育についても課題となってきている。
健康・安全	健康支援	4 様々な感染症対策への取り組みは、年間を通して正しい理解、正確な情報収集や保護者への情報の周知と協力依頼の繰り返しの中で対応してきた。しかし保育者の的確な判断や指示の遅れにより感染拡大を防げず、より専門性を高めることの必要に迫られる場面もあった。その為に誤嚥や熱性けいれんの具体的な対応について職員会議で実技演習を行うなどした。今後もより一層細やかな健康観察と衛生的な環境の確保、保護者との連携などに努めていきたい。

	食育の推進	4	アレルギー児に対しては、保護者、管理栄養士とこまめに話し、提供の際にも間違いがないようクラスで確認を何度も行ってから提供をした。食育に関しては、管理栄養士や調理員に食べている姿を見てもらうことで交流を図ったり、親子クッキング（任意参加）を通して保護者にも管理栄養士の話を聞いてもらう活動を行った。今後も継続して食に興味を持てるような活動を行ったり、月案作成の段階で管理栄養士と相談する事も考えている。極度の摂食障害のある子もいるため、管理栄養士を交えての面談や、関連機関の助言を得ながら、健康面のサポートを行っている。個々に応じた細やかな対応と共に食育活動に取り組んでいきたい。
	環境衛生管理・安全管理	4	今年度は安全管理チームを立ち上げ、安全面の強化に努めた。職員全員で園内の危険個所を洗い出し、可能な範囲で工夫や改善に努めた。気づいていても機会がなければ自ら声を上げずにいる状況もあった。改善策のアイデアにも乏しく、チームの構成員の働きによるところが大きかった。又、施設設備の問題ではなく保育者の安全意識や配慮不足によるところも大きく、気づいたら声を出す習慣を職員全体で意識していきたい。そこから子どもたちの目による安全チェックなど活動を広げ、子どもなりに自分の身を守る正しい方法を身に付けることにも繋げていきたい。
	災害への備え	4	大きな災害に見舞われた際の非常災害対策計画書の完成と安全対策の再構築を行ったが、本番に繋がる訓練の不足を感じている。避難訓練の計画段階で実際の被災状況を想定するなどして、形だけの訓練にならないよう努めていきたい。個々の役割分担を全員が理解して即座に対応するための準備、防火扉や止水版の扱いの訓練、非常持ち出し品の整備等対応についてやや遅れがある。地域の防災訓練への参加などは積極的に参加すべく、町内会に申し出たが、まだ実現に至っていない。
子育て支援	子育て支援全般	4	地域の関連機関との連携は毎年少しずつ強化されてきた。今後も、社会の中で子育てが豊かに行える環境作りに貢献していきたい。 保育時間が長かったり懇談会等に参加しにくい家庭への配慮に努め、保護者が前向きに子育てをしながらも社会で活躍できるよう、時間の調整など具体的な手だてを工

			夫している。特別な支援を必要とする子どもも多く、公立幼稚園の教育相談等やデイサービスの訪問支援を利用しながらより良い支援につながるようにしている。
	園児への子育て支援	4	保護者と直接顔を合わせて話す機会を大事にしたいものの、登降園の時間によっては担任が直接話をするのが難しい場合があった。その改善策として、今年度は副担任が午後の保育を担当し、一日を通しての子ども様子を保護者に伝えられるような職員配置を行った。ここ数年、保護者の悩みも増えており、対応の難しさを感じている。関連機関とも必要に応じて連携し、相互に信頼できる関係を築いていきたい。
	地域における子育て支援	4	以前から行っている「にじいろサークル」（メンバー固定）と「子育て広場」（都度募集）は形を変えながらも継続し、子育て相談の良い機会とすることができた。相談を希望して参加する保護者のために、活動後にゆっくりと話ができる体制を取っている。一時預かり事業は乳児の一時預かりの希望が増えてきているが、人材確保の面から3歳児以上に限定せざるを得ないのが現状。同窓会や小学校卒業の集い等には多くの保護者が集まってくれた。コロナによって途絶えていた保護者による人形劇サークルが地域の元のメンバーによって再開され楽しい公演が催された。現役保護者に繋げていくことはできていないが、地域との関わりとして卒園児やその保護者との繋がりを大事にしていきたい。実態に応じた関わりや支援のために、今できるところから前進していきたい。
資質向上	職員の資質向上	4	今年度は、職員会議にワークショップを多く取り入れ、子どもの疾病について学んだり、保育会議の中で研修動画の分かち合いの時間を持つなどした。ただ、日々の保育業務も多くある中で、積極的に学びを深めていくのは難しい現状もあり、保育者の学びと気づきを分かち合う時間をどのように確保するのか、再考の必要がある。又、保育・事務・調理・栄養管理・用務など様々な働きについて相互に理解し合い助け合わなければならないところだが、働く職種によっての理解や目指す方向の違いが表出し、話し合による一致に時間を要し、園全体での一致や協力体制について改めて考えさせられる年度となった。

	職員研修	<p>4 研修参加の機会は少しずつ充実してきている。全体的に自身の資質向上のために学びたいという職員の気持ちは強い。職員の向上意識があるからこそ、業務全体の中での研修体制の確立と学んだことを分かち合う時間の確保が課題となってきている。研修時間の確保や参加者の調整など昨年よりも難しく感じられた。園の教育保育方針の浸透、具体的課題への取り組みのためにも、園全体で研修の内容を共有し、学びを実践していくための仕組み作りが必要と思われる。せっかく受講した研修が、個々の質の向上のみならず、園全体の保育の質の向上に繋がるような手だてを整えていきたい。今年度も日程調整が難しい中で公開保育を行い小学校教員・デイサービス職員・施設関係者の方々との意見交換や札幌国際大学から講師を招いての保育研究を継続できたことは意義深かった。</p>
総合	<p>職員相互に助け合いながら、保育理念の理解とそれに基づいて一人ひとりを大切にする保育の実践に務めていきたいと、これまで以上に強く願う1年となった。認定こども園移行3年目を迎え様々な難しさが浮き彫りになり、試行錯誤の連続であった。急激な職員の増員に対応し切れず、職員の意思統一と協力体制の不十分さ等、難しさを覚えることも多かった。</p> <p>その中でも話し合いと会議方法を見直し、「一人ひとりの子どもの豊かな育ち」と「大人も子どもも共に支え合い育ち合う」との基本姿勢を崩すことなく、保護者の信頼を得ながら歩むことが出来たのは、仕事を通して与えられる喜び、個々の努力、各々の人間性をもって支え合った事の結果であると思う。</p> <p>保育者不足が深刻になりつつある今、人材の確保と保育者としての育ちがなければ保育の質の向上は望めない。社会の変化や園の現状を正しく捉え、問題の見過ごしや先延ばしがないよう園全体の運営と丁寧な保育を日々心掛けていきたい。わずかな事でも共に喜び、見えない守りと導きと、多くの支えに感謝しつつ、見直しや改善を怠ることなく歩んでいきたい。</p> <p>具体的には</p> <p>1. [職場環境]</p> <p>「自分たちで気づき、自分たちで変えていく」ために様々なチームを立ち上げたが、初年度で十分な活動ができなかった点を強化していく。一人ひとりが声を上げやすく、自発性を発揮しやすい職場環境を共に作り上げる。</p>	

	<p>2. [子どもを見る目] 子どもの心の動きを汲み取る目を養い、子どもたちの興味関心を保育に活かす。</p> <p>3. [行事の見直し] 日頃の保育の中に行事があることを再確認し、日常の保育と無理なく繋がった豊かな活動となるようにする。</p> <p>4. [研修と分かち合い] 積極的に参加するために必要な調整を行うと共に、園内研修のあり方を工夫する。研修を受けて終わるのではなく、職員間で分かち合いの時間を持つ。</p>
--	---

5. 関係者評価委員会の総合的な評価

(関係者評価実施 2025 年 2 月 4 日)

結果	評価の理由
4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 看護師が常勤になったことで、より安心感のある受け入れ態勢が整ったことは保護者の安心感にも繋がるように思う。命を預かる事の責任の重さを個人の意識ではなく園全体の責任として強化した姿勢を評価したい。職員のチームの中に「安全管理」を作り職員全体の意識向上を図ろうとした点も良いと思う。 ・ 園の目標の中に社会の要請が十分に反映できていないとの自己評価について、詳細な内容の説明で、0歳から満3歳児の一時預かり・誰でも通園制度への参入・障がい児保育の受け入れ等、園の現状と取捨選択しながら進めている事が伺える。子育てを取り巻く社会の動きや制度上の変化に注視する姿勢は大切と思う。その上で、現に受け入れている子ども達の保育を最優先にして慎重に対応していることは、園全体としては決してマイナスではないと評価する。 ・ 冷凍母乳などの新しい取り組みでは、衛生管理上の緊張も大きかったことと思う。乳児の食事に関しては個別対応が多い事の説明を受けたが、家庭でも忙しさや親の都合によって、短時間で準備をすることが多く、丁寧に進めるのは難しい。保護者との共通理解を深めながら、保育者・管理栄養士・調理員で協力して個別に対応していくのは大変な労力と思うが、是非これからも頑張ってもらいたい。

- 認定こども園移行のタイミングで、職員を大幅に増員した事の弊害が3年経った今になって表面化してきた事は理解できる。数年に一度職員が入れ替わる程度だった職場で、経験者も含め一気に何人もの新人教育を進めるのはさぞ難しかったと思う。養成校の学生も減り人員確保が難しくなっている時代に、「子どもと関わる仕事」を希望して進学先や職を選んできたのだから、WEB会議等のように今の時代に即した方法も取り入れつつ、これまで同様、人と人とが触れ合うことのできる職場環境を大切にしていって欲しい。卒園児の中から幼稚園やこども園の先生を志す学生が毎年のように出てくるのは過去の保育の結果だと前向きに受け止めて欲しい。職員の意思統一と協力体制の構築は焦らずに進めていくしかないと思う。
- こども園移行3年目で、具体的な課題が見えてきた事も理解できた。満足感と納得感の持てる仕事がしたいと願う一方で、丁寧に仕事をしようとするとうしても余計に時間がかかってしまう現実があり、効率化だけでは解決し難い側面も見え隠れしている。少しでも良い保育がしたいと取り組んだ結果として得られる満足感と、「もっとできたのではないか」という反省のなかで、自己評価が「4」に留まるのだろうが、気持ちとしては「5」でも良いのではないかと思う。